



Title	「偽善」とは何か？日本における偽善判断の心理学的検討
Author(s)	Zhao, Xinyu
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105376
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (ZHAO XINYU)

論文題名

「偽善」とは何か？日本における偽善判断の心理学的検討

論文内容の要旨

序章

複雑な社会において、言動を常に一貫させることは難しい。他者の言動が一致していない場面を目撃すると、人は時にそれを道徳的な欠陥と捉え、偽善と非難する (Monin & Merritt, 2012)。本研究の目的は、人が他者を偽善的と判断する際に手がかりとして用いる状況要素の検討であった。

Effron, O' Connor et al. (2018)は、不一致の検出とその原因推論という2段階の認知過程によって偽善判断が生じるとするモデルを提唱している。この二段階モデルによると、観察者が言動の不一致を知覚し (Step a)、その不一致の目的が不当な道徳的利益の獲得にあると推論した (Step b) とき、行為者は偽善的と判断される。先行研究では、不一致の原因推論 (Step b) に影響する状況要素として、行為者の属性 (Who)、発言と行動の時間順序 (When)、行動の道徳性 (What) などの要素 (3W1H) が指摘されてきた。しかし、先行研究では、状況要素間の影響力の強弱関係 (課題1) や、発言内容が偽善判断に与える影響 (課題2) については十分に検討されていない。

そこで、本研究では3つの研究を行い、偽善判断に影響する状況要素を再検討した。研究1では、先行研究と自由記述を基に状況要素を整理し、偽善判断にて優先的に参照される状況要素を明らかにした。研究2・3では、研究1を踏まえ、典型的な偽善パラダイムである言行不一致に着目し、発言内容が偽善判断に及ぼす影響について検討した。研究2では、他者非難と自己否定という2つの発言形式が偽善判断に与える影響を比較した。研究3では、たばこの警告ラベルとたばこ企業の商業活動の不一致を背景に、善意による警告でも内容次第で偽善と見なされるかを検討した。

本研究は、不一致が偽善と判断される状況を体系的に示し、偽善判断の認知モデルを精緻化するとともに、日常生活における不要な偽善批判の回避に向けた実践的示唆を提供するものである。

第1章：「偽善判断に影響を与える状況要素の検討」 (研究1)

研究1は、観察者が偽善判断を下す際に主に参照する状況要素の検討を目的とした。研究1-aでは、偽善事例のコーディングを通じて、偽善を構成する状況要素を3W1Hの枠組みで確認した。研究1-bでは、複数の状況要素を同時に検討可能なコンジョイント分析を用い、研究1-aで確認した状況要素が偽善判断に与える影響を検討した。その結果、偽善判断の際には、不一致が道徳に関わるか (What)、発言と行動の時間的順序 (When)、印象操作の方法が押し付けか欺瞞か (How) の3つの状況要素が主に参照されることが明らかとなった。さらに、観察者が典型的な偽善場面として想定するのは、道徳的行為 (What) において言→行の順で (When) 不一致が生じ、かつ欺瞞 (How) によってポジティブな自己イメージを操作している場面であることが明らかになった。研究1では、これまで個別に検討されてきた複数の状況要素を初めて横断的に比較し、不一致が偽善と解釈される認知過程において、状況要素が均等には作用しないことが示された。

第2章 「否定か非難か：発言の内容の違いと偽善判断」 (研究2)

研究2では発言内容に焦点を当て、言行不一致の場面において、他者の不道徳行為の非難と自身の不道徳行為の否定という2種類の発言内容が偽善判断に及ぼす影響を検討した。研究2-aでは、日常的な不道徳行為に関して、非難を伴う言行不一致は否定を伴うものよりも偽善的と評価されやす

いとするJordan et al. (2017) の追試を行った。研究2-bでは、極端な不道德行為である違法行為に関して、同様に非難と否定が偽善判断に及ぼす影響を検討した。その結果、Jordan et al.

(2017) の知見は支持されず、両方の逸脱行為に関して、非難と否定を伴う言行不一致は同程度に偽善的と判断された。研究2の結果は、非難以外の発言内容でも偽善判断は生じ、自身の不道德行為を否定した上でそれに反する行動をとる場合にも、観察者は同様に偽善的と評価する可能性があることを示唆している。

第3章 「警告ラベルがタバコ企業のイメージ評価に与える影響」 (研究3)

研究3では引き続き発言内容に焦点を当て、善意に基づくたばこの警告ラベルが、たばこ企業に対する偽善的との評価に繋がるかを検討した。研究3-aでは、警告ラベルにおける健康被害の対象 (自己/家族) の違いが、たばこ企業に対する偽善判断に与える影響を検討した。研究3-bでは、健康被害の警告に加えて喫煙への介入を促すメッセージを4種類提示し、同様の検討を行った。その結果、評価者が喫煙者か非喫煙者かや警告文の内容にかかわらず、たばこ企業は偽善的と評価されなかった。これは、警告ラベルと企業活動の間の不一致が知覚されにくい上に、警告表示が法的義務であるため不一致が企業の利己的動機に帰属されにくいためだと考えられる。以上より、研究3では善意の警告に基づく言行不一致が偽善と判断されることは確認できなかった。しかし同時に、この結果は Effron, O' Connor et al. (2018) の二段階モデルを間接的に支持しており、不一致が明確に知覚されない場合や、その原因が利己的動機にあると推論されない場合には、言行不一致は偽善判断に結びつきにくいことが示された。

第4章 総合考察

本研究の目的は、人々が他者を偽善的と判断する際に手がかりとする状況要素の検討であった。特に、Effron, O' Connor et al. (2018) による偽善判断の二段階モデルのうち、不一致の原因推論 (Step b) に着目し、不一致が偽善と解釈される状況要素について検討した。

3つの研究の結果、不一致が偽善と解釈される認知過程において、各状況要素は均等に作用しないことが明らかとなった。また、道徳的行為 (What) において言→行の順 (When) で不一致が生じ、かつ欺瞞 (How) によって自身の印象を操作している場合に、行為者は最も強く偽善的と判断された。さらに、他者の不道德行為の非難を伴う言行不一致と自身の不道德行為の否定を伴う言行不一致は同程度に偽善的と評価された。他方で、善意に基づく警告は、行動と一貫せずとも偽善とは見なされなかった。

本研究は理論面と実践面の双方に貢献する。理論的には、Effron, O' Connor et al. (2018) の二段階モデルを精緻化し、状況要素ごとに影響力に差があることを示した点で、偽善判断の認知プロセスへの理解を深化させた。また、偽善と嘘の区別に関する手がかりとして、偽善は道徳領域に関する不一致に特徴づけられることを示し、両概念の理論的境界をより明確にした。

実践的には、他者の言動の不一致に直面した際、不一致が生じた理由を慎重に検討し、中傷や道徳的非難を控えることの重要性を示唆する。また、不一致が避けられない場合には、影響力の大きい状況要素 (例：欺瞞的な印象操作、強い非難発言) を回避することで、評判の保護や対人関係上のコスト (Effron, Markus et al., 2018) の低減が見込まれることを示した。

ただし、本研究では顕在的な (言行) 不一致がある場合に限定して偽善判断を検討しており、観察者の個人差については検討が不十分である点には留意が必要である。また、本研究で用いた場面想定法には、現実場面の複雑さを再現しにくいという制約もある。これらの点から、今後はより生態学的妥当性の高い方法や個人特性を考慮した上で、本研究で得られた知見の一般化可能性について再検討する必要がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Z H A O X I N Y U)			
論文審査担当者	(職)		
	氏 名		
	主 査	教授	綿村 英一郎
	副 査	教授	三浦 麻子
	副 査	教授	鹿子木 康弘

論文審査の結果の要旨

趙心語氏の博士論文「『偽善』とは何か？－日本における偽善判断の心理学的検討」は、人々が他者の言動をどのような条件のもとで「偽善的」と判断するのかについて、社会心理学の観点から体系的に検討した研究である。日常生活において、善意に基づく行為や道徳的主張は必ずしも肯定的に受け止められず、時に偽善として非難される現象は広く観察される。しかし、その判断過程については、従来十分に整理されてこなかった。本論文は、このような社会的に重要かつ理論的にも未解明な問題に正面から取り組んだ点に大きな特徴がある。

従来の偽善研究では、発言と行動の不一致、あるいはダブルスタンダードといった個別の側面に着目した研究が多かった。しかし一方で、複数の状況要素が同時に存在する現実場面において、それらがどう統合され偽善判断が形成されるのかについては十分に検討されていなかった。これに対し、趙氏は、Efron らによって提唱された偽善判断の二段階モデルを理論的基盤としつつ、原因推論段階に影響を及ぼす状況要素に焦点を当て、偽善判断の認知過程を精緻化することを目的とした。

本論文は、序章および全三章の実証研究、ならびに総合考察から構成されている。序章では、言行不一致を中核とする道徳現象として偽善を位置づけたうえで、偽善判断における状況要素間の影響力の強弱関係や、発言内容の違いが及ぼす影響といった未解決の課題が明確に提示されている。

第1章（研究1）では、観察者が偽善判断を行う際に参照する状況要素を包括的に整理することを目的とし、偽善事例のコーディングおよびコンジョイント分析が実施された。その結果、不一致が道徳領域に関わるかどうか、発言と行動の時間的順序、および印象操作の方法といった特定の状況要素が偽善判断において優先的に重視されることが示された。これにより、偽善判断において状況要素が均等に作用するわけではないことが初めて実証的に明らかにされた。第2章（研究2）では、発言内容に着目し、他者の不道徳行為を非難する発言と、自身の不道徳行為を否定する発言という二つの形式が偽善判断に与える影響が検討された。その結果、先行研究で指摘されてきた「非難を伴う言行不一致がより偽善的と判断される」という見解は必ずしも支持されず、否定を伴う言行不一致であっても同程度に偽善的と評価されることが示された。第3章（研究3）では、善意に基づく行為であっても偽善と見なされうるかという問いを、たばこ企業による警告ラベルを題材として検討した。その結果、警告表示と企業活動との間に不一致が存在していても、その不一致が利己的動機に帰属されにくい場合には、偽善判断が生じにくいことが明らかとなった。この知見は、偽善判断において原因推論が決定的役割を果たすことを示しており、二段階モデルを間接的に支持するものである。

以上の一連の研究から、偽善判断は単なる言行不一致の検出によって自動的に生じるものではなく、複数の状況要素を統合した原因推論の結果として形成されることが明確に示された。本論文は、偽善判断の認知モデルを理論的に精緻化するとともに、不要な道徳的非難や中傷を回避するための実践的示唆を提供している点でも高く評価できる。

以上の理由から、本論文は社会心理学における偽善研究に重要な理論的・実証的貢献をなすものであり、今後の発展可能性も大きい。よって、本論文は博士（人間科学）の学位授与に十分値するものと判断する。